

---

 ニ ュ ー ス
 

---

日本の火山活動概況（2008年11月～12月）



図 1. 2008年11月～12月に目立った活動があった火山

#### 雌阿寒岳 (43°23'12"N, 144°00'32"E)

11月17日に、火口周辺警報を発表し、噴火予報（平常）から火口周辺警報（火口周辺危険）に引き上げた。12月16日に噴火警戒レベルを導入し、火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表した。

11月9～12日にかけて体に感じない程度の小さな火山性地震が増加し、16日には振幅が小さく継続時間がやや長い火山性微動が発生した。さらに、11月17日10時05分頃から火山性の連続微動が発生したことから、火山活動がやや高まった状態となっており、ポンマチネシリ火口周辺に影響する程度の噴火の可能性があるとして、11月17日14時30分に火口周辺警報（火口周辺危険）を発表した。

その後、11月18日及び11月28～29日にポンマチネシリ火口でごく小さな噴火が発生した。噴火が発生した主要な火口はポンマチネシリ96-1火口で、同第4火口からも噴出物が放出された。

上空からの観測並びに北海道大学、北海道立地質研究所、釧路地方気象台及び網走地方気象台の現地調査によ

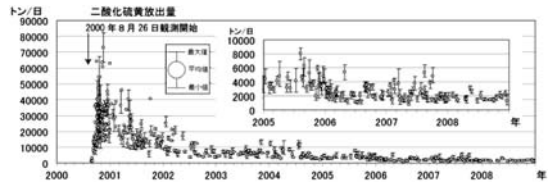


図 2. 三宅島 火山ガス（二酸化硫黄）放出量の変化（2000年8月～2008年12月）

ると、18日の噴火による火山灰はポンマチネシリ火口の南東側数百mまで分布し、28～29日の噴火による火山灰は同火口周辺の全方向に拡がり、東側では約8km、北側では約6kmまで観測された。これらの噴火による噴出物量は約12,000トンと推定され、2006年3月21日のごく小さな噴火による噴出物量と同程度かやや多いと推定される。

11月28～29日の噴火以降は、噴火の発生はなく、ポンマチネシリ火口の噴煙がやや多い状況で推移した。また、火山性微動が時折発生し、火山性地震は増減を繰り返した。

#### 浅間山 (36°24'23"N, 138°31'23"E)

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中6回実施）では、二酸化硫黄放出量は一日あたり1,100～4,800トンと依然として多い状態で推移した。

11月11日に群馬県、17日に陸上自衛隊の協力により行った上空からの観測では、山頂火口底中央部とその周辺に高温領域が引き続き認められた。火口底中央部の高温領火口底の地表面温度分布等に特段の変化はなかった。

山頂火口の噴煙量はやや多い状態が続き、噴煙高度は火口縁上概ね200mで推移した。また、夜間には高感度カメラにより微弱な火映が時々観測された。

火山性地震は、山頂火口直下のごく浅い所で発生したと推定されるBL型地震のやや多い状態が続き、また、振幅の小さな火山性微動もやや多い状態で推移した。震源の浅部への移動等の変化はみられなかった。

山体周辺のGPS連続観測では、一部の基線で7月初め頃からわずかに伸びの傾向がみられる。傾斜観測では、火口直下浅部へのマグマ上昇を示す変化は認められない。

#### 三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

島内でCOMPUSSを用いたトラバース法による火山

ガス観測（期間中3回実施）では、二酸化硫黄放出量は一日あたり700~2,600トンと依然と多量の火山ガス放出が続いていた。また、三宅村の火山ガス濃度観測でも山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。発生した地震のほとんどがやや低周波地震（約3~10Hzが卓越する地震）で、高周波地震（約10Hz以上が卓越する地震）も時々発生した。震源はいずれも山頂火口直下浅部と推定される。また、振幅の小さな火山性微動が時々観測された。

山頂火口の噴煙高度は火口縁上100~300mで推移した。

全磁力観測では、火口直下の熱帯磁が鈍化しながらも続いている。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮と深部の膨張が継続している。

#### 硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E)

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地震活動は落ち着いた状態で経過している。国土地理院の観測によると、2006年8月以降見られている島全体が隆起する地殻変動は、11月末頃から鈍化したものの継続している。

#### 福徳岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

11月7日および11日に第三管区海上保安本部、また12月10日に海上自衛隊が上空から観測を行った。11月7日の観測では、福徳岡ノ場から北方向に幅約200~300m、長さ約300mの乳白色から黄褐色に変化する帯状の変色水が確認され、11日には福徳岡ノ場から北方向に長さ約300m、西方向に長さ約150mの乳白色、薄褐色の扇状に広がる変色水が確認された。また、12月10日には、福徳岡ノ場付近の海面で湧出点付近が乳白色、そこから東方向に幅約65m、長さ約5,500mの褐色及び薄褐色の変色水が確認された。いずれも火山活動によるものとみられる。なお、同海域付近に浮遊物は確認されなかった。

#### 阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

中岳第一火口の湯だまりは、12月26日の現地調査で湯量が9割に減少しているのが確認されたが、表面温度に大きな変化はなかった。

12月23~26日にかけて、中岳第一火口の南側火口壁からごく少量の火山灰が観測されたほか、12月27日以降は、南側火口壁の噴気孔で火災現象が時々観測された。いずれの現象も、火口内で発生した局所的な活動と考えられる。

COMPASSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中4回実施）では、二酸化硫黄放出量は一日あたり100~400トンと少ない状態で経過した。

地震活動は低調な状態で、孤立型微動は1日あたり概ね100回以下で推移した。

#### 桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

ごく小規模な噴火が昭和火口で2回、南岳山頂火口では時々発生した。爆発的噴火の発生はなかった。また、昭和火口では夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映現象が観測された。

11月13日に第十管区海上保安本部、および12月16日に海上自衛隊鹿屋航空分遣隊の協力を得て行った上空からの観測では、昭和火口内は噴煙のため確認できなかったが、南岳山頂火口内および火口周辺、昭和火口周辺の状況に特段の変化は認められなかった。

COMPASSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中3回実施）では一日あたり700~1,700トン前後とやや多い状態で経過した。

火山性地震及び火山性微動は少ない状態で経過している。

国土地理院のGPS連続観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部へのマグマ注入による膨張が続いている。大隅河川国道事務所が設置した有村観測坑道の水管傾斜計による傾斜観測では、11月中旬頃からわずかながら火口方向へ下降する変動が認められている。

#### 薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや活発な状態が続いており、噴煙高度は火口縁上概ね200mで推移した。12月16日に海上自衛隊鹿屋航空分遣隊の協力により実施した上空からの観測では、硫黄岳火口内やその周辺部の熱異常域の分布に大きな変化は認められなかった。

火山性地震はやや多い状態が続いている。発生した地震の多くがB型地震で、A型地震も時々発生した。また、火山性微動も時々観測された。

#### 口永良部島 (30°26'36"N, 130°13'02"E (古岳))

GPS連続観測では、9月以降、新岳火口浅部の膨張を示す変化が観測されている11月17日~21日にかけて、気象庁機動調査班が実施した光波測距観測でも、新岳火口の膨張を示す変化が確認された。

振幅のやや大きな火山性微動は9月以降引き続きやや多い状態が続いているほか、主に新岳火口直下のごく浅い領域を震源とする火山性地震も時々発生した。

遠望カメラ（新岳火口の北西約3km）の観測による

と、新岳火口から火口縁上概ね 100 m の噴気が時々観測されたほか、11 月 13 日に第十管区海上保安本部および 12 月 16 日に海上自衛隊鹿屋航空分遣隊の協力を得て実施した上空からの観測では、新岳火口周辺では引き続き噴気や熱異常域が認められた。また、独立行政法人産業技術総合研究所が実施した火山ガスの観測では、10 月以降、二酸化硫黄の放出量の増加傾向が認められるなど、火山活動が高まった状態が続いている。

**諏訪之瀬島 (29° 38' 18" N, 129° 42' 50" E (御岳))**

爆発的噴火が時々発生したほか、小規模な噴火も発生した。十島村諏訪之瀬島出張所によると、集落(御岳の南南西約 4 km)で降灰が時々確認された。11 月 13 日に第十管区海上保安本部および 12 月 16 日に海上自衛隊鹿屋航空分遣隊の協力により実施した上空からの観測では、御岳火口周辺の状況等に特段の変化は認められなかったが、火口内に溶岩頭が確認された。

地震活動は、B 型地震がやや多い状態が続いたほか、11 月は火山性微動も多い状態となるなど、消長を繰り返しながら推移している。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL [http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.htm](http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm)  
(文責：気象庁地震火山部火山課 飯野英樹)

**〇「道路政策の質の向上に資する技術研究開発研究」の募集について**

国土交通省道路局は、道路分野における基礎的な要素技術から、災害時の迅速な対応を可能にする技術開発などの応用技術までの幅広い技術開発研究に対して、1000 万円～5000 万円/年(最長 3 年間)規模の研究を募集しています。提案締切は 1 月 19 日です。

詳細は <http://www.mlit.go.jp/road/tech/index.html> をご参照下さい。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 12 月 18 日送信しました)

**〇2009 年度地球化学研究協会「三宅賞」および「奨励賞」候補者募集について**

**【地球化学研究協会】**

2009 年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者を募集します。当協会会員及び関連諸学会会員によるご推薦の何れでもお受けします。下記の要領でご応募下さい。

地球化学研究協会理事長 石渡良志

**2009 年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集**

**1. 三宅賞**

対象：地球化学に顕著な業績を修めた研究者  
表彰内容：賞状、副賞として賞牌および賞金 30 万円、毎年 1 件 (1 名)

**2. 奨励賞**

対象：2009 年 4 月 1 日の時点において 40 才未満で、地球化学の進歩に優れた業績を挙げ、将来の発展が期待される研究者  
表彰内容：賞状および賞金 10 万円、毎年 1～2 件 (1～2 名)

3. 応募方法：地球化学研究協会のホームページからダウンロードした申請書に、略歴・推薦理由・研究業績などを記入し、主な論文 10 編程度(三宅賞)、2 編程度(奨励賞)を添えて、下記のあて先へ送付して下さい。応募書類等は、三宅賞及び奨励賞選考のためにのみ選考委員会などで用いられます。

4. 締切：2009 年 8 月 31 日

5. 地球化学研究協会ホームページ：

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gra/>

6. 応募先：〒100-8212 東京都千代田区丸の内 1-4-5 三菱 UFJ 信託銀行リテール受託業務部公益信託グループ(公益信託) 地球化学研究基金 江川康治

7. 問合せ：地球化学研究協会事務担当まで、電子メールでお願いします。

E-mail : [citaro1939@yahoo.co.jp](mailto:citaro1939@yahoo.co.jp)

または [t-sagi@m3.gyao.ne.jp](mailto:t-sagi@m3.gyao.ne.jp)

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 1 月 30 日送信しました)

**〇日本地球惑星科学連合の会員登録**

日本地球惑星科学連合が社団法人として 12 月にスタートし、1 月 9 日から 5 月の連合大会の講演申込と同時に会員登録も開始しました。これまで連合には日本火山学会員の約 8 割の方が個人登録されていました。このたびの連合社団法人化を機に改めて「会員」登録を行って下さい(これまでの ID 番号は継承されます)。連合の年会費は 2,000 円です。大学院生は 1,000 円です。また、これまで連合に未登録であった方も、是非この機会に連合の会員になられることをお勧めします。会員になると連合大会の参加登録費が 5,000 円安くなる(一般会員の場合)という大きな特典があります。個人会員登録及び